

# 口腔前がん病変から口腔潜在的悪性疾患への用語変更について

大分大学医学部歯科口腔外科学講座  
教授 河野憲司

## 1. はじめに

2017年に改訂されたWHOの頭頸部腫瘍分類（第4版）で、oral potentially malignant disorders（口腔潜在的悪性疾患）という用語が提示されました。これは従来、口腔の前がん病変、前がん状態という用語で分けられていた病変をひとつの疾患概念としてまとめたものです。近年、歯科医師による口腔がん早期発見の機運が高まっていることに伴い、口腔がんの前駆病変についての正しい知識をもつことが必要になっています。今回は、口腔前がん病変・前がん状態から口腔潜在的悪性疾患という概念に変わった経緯について解説いたします。

## 2. WHOによる口腔がんの前駆病変の名称、定義、対象疾患の変遷

WHOは口腔領域の腫瘍分類の初版を1971年に出版しました。その後、1997年、2005年、2017年に改訂を行い、口腔がんの前駆病変についての名称、定義、該当疾患を修正してきました（表1）。

まず初版（1997年）では、口腔がんの前駆病変をPrecancerous states（前がん状態）という用語で表記し、白板症、紅板症、扁平苔癬、粘膜下線維症の4つが該当すると記載しました。白板症、紅板症、扁平苔癬は本邦でもよく見られますが、粘膜下線維症はインドなどの特殊な習慣（咬みタバコやベテルナツツの使用）がある国に見られる疾患で、本邦ではほとんど見られません。

第2版（1997年）では、口腔がん前駆病変をPrecancerous lesions（前がん病変）とPrecancerous conditions（前がん状態）の2つに分けて、前がん病変は「正常よりも癌化しやすい形態的变化を生じた組織」、前がん状態は「癌化リスクの上昇に関係する状態」と定義しました。該当する疾患として、前者には白板症、紅板症、逆喫煙による口蓋角化症、後者には鉄欠乏性嚥下困難、扁平苔癬、口腔粘膜下線維症、梅毒などが挙げられました。

ここで「前がん病変」と「前がん状態」の区別は、前者が口腔がんの発症部位と同じ場所に先行して存在するのに対して、後者は口腔がんの発症部位と異なる部位に見られることの多い病変とされています。単純に癌化率の差や、口腔局所疾患か全身疾患かで区別されているわけではありません。私自身の臨床研究でも、前がん病変である白板症では組織学的に口腔がんへの移行がしばしば捉えられるのに対して、前がん状態の扁平苔癬では口腔がんへの組織学的移行をとらえることが困難でした。言いかえると、口腔前がん病変は口腔がんへ直接移行することが証明されている疾患、一方、口腔前がん状態は発癌しやすい環境を作っているが口腔がんへの直接移行が十分に証明されていない疾患、と理解するとよいと思います。

第3版（2005年）ではPrecancerous lesions という用語はなくなっておりますが、従来と大きな変更はなく、第2版の内容が踏襲されました。

その後、2007年のWHO Collaborating Centre for Oral Cancer and Precancer（口腔がんと前がん病変に関するWHO共同研究センター）の白板症の定義に関する会議で、白板症という病名は、癌化リスクのない疾患を完全に除外した後に残る、癌化リスクを否定できない白色斑のみに用いるべきである、という提言を行いました。同時に、白板症患者でも口腔がんは必ずしも白板症と同一部位に発症していないこと、つまり白板症とは別の部位の一見正常に見えるところに口腔がんが生じるようなケースがしばしば見られることから、前がん病変と前がん状態を区別する意味がなく、両者をまとめて Oral potentially malignant disorders（口腔潜在的悪性疾患）と呼ぶことを提唱しました。

第4版（2017年）では、口腔がん前駆病変が Oral potentially malignant disorders（口腔潜在的悪性疾患）と改称され、該当疾患として紅板症、紅白板症、白板症、口腔粘膜下線維症、先天性角化異常症、無煙タバコ角化症、逆喫煙による口蓋角化症、慢性カンジダ症、扁平苔癬、円板状ループスエリテマトーデス、梅毒性舌炎、光線性角化症（口唇のみ）の12疾患が列挙されています。

### 3. Oral potentially malignant disorders（口腔潜在的悪性疾患）に含まれる疾患

表1に示す通り、12の該当疾患が列挙されています。このうち日常臨床でも遭遇することの多いものは、白板症、紅板症、紅白板症、扁平苔癬、慢性カンジダ症などでしょう（写真1）。

慢性カンジダ症は、第4版で初めて口腔がん前駆病変として記載されました。高齢者や全身状態不良の患者に見かけるカンジダ症は白苔を特徴とする急性偽膜性カンジダ症で、慢性カンジダ症とは異なる疾患です。慢性カンジダ症には萎縮性と肥厚性があり、慢性肥厚性カンジダ症が口腔がんと関係があります。見かけが白板症に似ているため、以前はカンジダ性白板症と呼ばれていました（この呼称は不適切であり、現在使われていません）。痛みを伴う白板症様病変では、慢性肥厚性カンジダ症を疑って検査をすすめます。

梅毒性舌炎は稀ですが、梅毒患者の増加に伴って今後遭遇する機会が増えるかもしれません。

### 4. おわりに

口腔がん前駆病変が、口腔の前がん病変あるいは前がん状態という名称から Oral potentially malignant disorders（口腔潜在的悪性疾患）へ改称された経緯を解説しました。改称されただけでなく、該当する疾患が増えていますのでご注意ください。

今後、本月報での口腔がん検診報告などでこの用語を用いますので、よろしく申し上げます。

表1 WHOによる口腔がん前駆病変の名称、定義、該当疾患の変遷

WHO 口腔咽頭腫瘍の組織分類 (第1版、1971年)	
Precancerous states (前がん状態)	白板症、紅板症、扁平苔癬、粘膜下線維症
WHO 口腔粘膜の癌腫と前癌疾患の組織分類 (第2版、1997年)	
Precancerous lesions (前がん病変) : 「正常よりも癌化しやすい形態的变化を生じた組織」	白板症、紅板症、逆喫煙による口蓋角化症
Precancerous conditions (前がん状態) : 「癌化リスクの上昇に関する状態」	鉄欠乏性嚥下困難、扁平苔癬、口腔粘膜下線維症、梅毒、円板状ループスエリテマトーデス、色素性乾皮症、水疱表皮症
WHO 頭頸部腫瘍の組織分類 (第3版、2005年)	
Epithelial precursor lesions (上皮性前駆病変)	白板症、紅板症/紅白板症
Precancerous conditions (前がん状態)	鉄欠乏症、口腔扁平苔癬、口腔粘膜下線維症、梅毒、円板状ループスエリテマトーデス、色素性乾皮症、水疱表皮症
WHO 頭頸部腫瘍分類 (第4版、2017年)	
Oral potentially malignant disorders (口腔潜在的悪性疾患) :	
「口腔における癌化リスクのある臨床症状」	
紅板症、紅白板症、白板症、口腔粘膜下線維症、先天性角化異常症、無煙タバコ角化症、逆喫煙による口蓋角化症、慢性カンジダ症、扁平苔癬、円板状ループスエリテマトーデス、梅毒性舌炎、光線性角化症 (口唇のみ)	

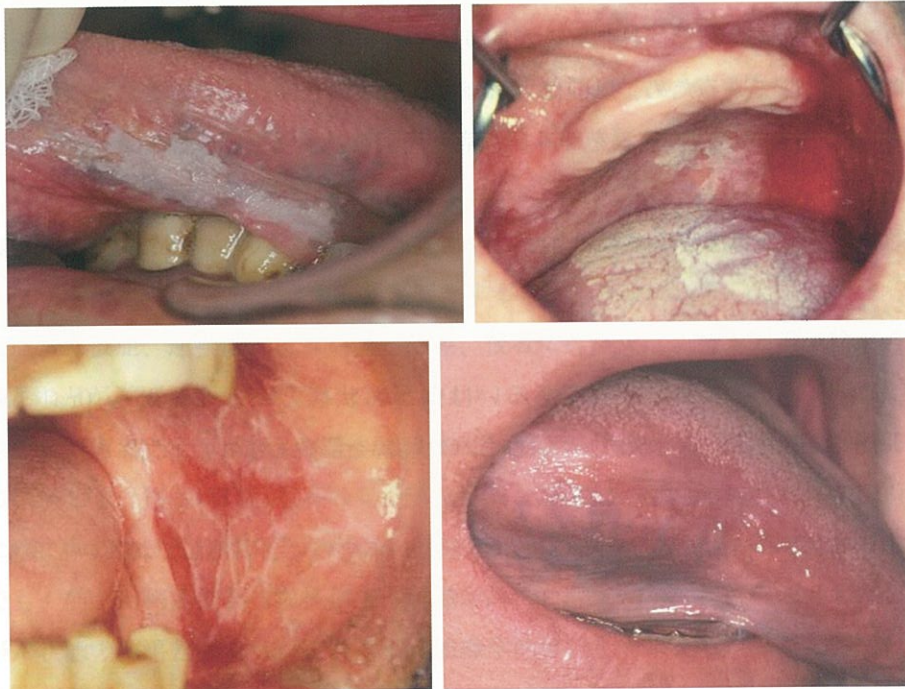


写真1 代表的な口腔潜在的悪性疾患

左上：舌の白板症、右上：頬粘膜・口蓋・舌に広がる紅白板症、左下：口腔扁平苔癬、右下：舌の慢性肥厚性カンジダ症